

Contents Vol.225

2021.12.21

01 巻頭特集

- 1 浪商学園が創立100周年
- 2 楠本教授が日本代表監督就任

05 NEWS

- 1 インカレ8連覇
ハンドボール部女子史上初 男子も準優勝
- 2 陸上インカレ
武本がやり投げ初V
400M岩崎 本学初の表彰台
- 3 教員採用試験過去最多合格
- 4 藪田がBMX・W杯初V
- 5 HPSC連携機関に本学を指定
- 6 日本水泳・水中運動学会開催
- 7 わくわくアダプテッド・スポーツクラブに
文部科学大臣表彰
- 8 名誉教授称号授与式を実施
- 9 サンライズキャンプ支援活動報告

09 大体大PEOPLE

田中 章博・サッカー「ソルティエロ大阪FC」代表

11 EVENT

- 1 「武道ツーリズム」を実施
- 2 健康増進ツアー
- 3 サッカー部の小川、泉森がJリーグへ
キャンプ実習
- 5 学園祭「雨山祭」をリアルと
一部オンラインで開催
- 6 断水中の和歌山北高校に
ミネラルウォーターを寄贈

14 コラム「ボーシャー」

コラム「窓」

浪商学園が創立100周年



記念誌、創設者マンガなど制作

大阪体育大学などを運営する学校法人浪商学園が11月15日、創立100周年を迎えた。約1000人が参加予定だった記念式典は感染症対策を考慮して来年度に延期されたが、100周年記念誌などの発刊、各設置校の100周年ビジョンの策定などを進め、JR大阪駅では大型のデジタルサイネージ（電子広告）で創立100周年をアピールした。

浪商学園は1921（大正10）年11月15日、浪華商業実修学校として開校。大阪市南区細工谷（現天王寺区堂ヶ芝）にあった工場を間借りして校舎とし、職員2名、生徒わずか十数名でスタートした。以後、火災と空襲で2度、校舎が全焼したが、移転と校名変更を繰り返しながら発展し、現在の大阪体育大学浪商中学・高等学校に至る。

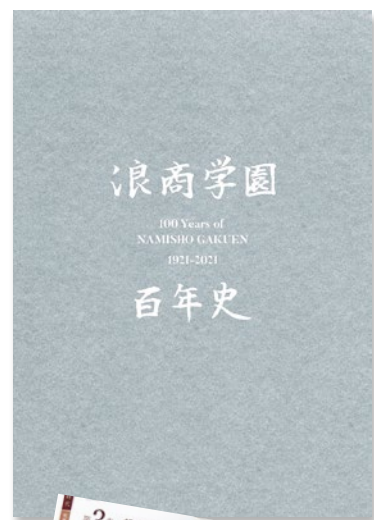
1949（昭和24）年に現在の大阪体育大学浪商幼稚園、1985（昭和60）年に浪商高校高槻学舎が改称されて大阪青凌中学・高等学校が開校。学園の卒業・卒園生総数は本学を含め、7万5562名（2021年度現在）を数える。

大阪体育大学は1965（昭和40）年、関西初の体育大学として創設され、東京五輪選手強化対策本部長の大島鎌吉氏を初代副学長、日本体育学会の創設メンバーの加藤橋夫氏を初代学部長に迎えた。1989（平成元）年、大阪府茨木市から熊取町に移転。1992年、大学院を設置した。

浪商学園は1921（大正10）年11月15日、浪華商業実修学校として開校。大阪市南区細工谷（現天王寺区堂ヶ芝）にあった工場を間借りして校舎とし、職員2名、生徒わずか十数名でスタートした。以後、火災と空襲で2度、校舎が全焼したが、移転と校名変更を繰り返しながら発展し、現在の大阪体育大学浪商中学・高等学校に至る。

1949（昭和24）年に現在の大阪体育大学浪商幼稚園、1985（昭和60）年に浪商高校高槻学舎が改称されて大阪青凌中学・高等学校が開校。学園の卒業・卒園生総数は本学を含め、7万5562名（2021年度現在）を数える。

大阪体育大学は1965（昭和40）年、関西初の体育大学として創設され、東京五輪選手強化対策本部長の大島鎌吉氏を初代副学長、日本体育学会の創設メンバーの加藤橋夫氏を初代学部長に迎えた。1989（平成元）年、大阪府茨木市から熊取町に移転。1992年、大学院を設置した。



浪商学園百年史



記念誌の「浪商学園百年史」では、学園の歩みを第1部・歴史編として、創設期・変動期の淡路時代、発展期・拡充期の茨木時代、飛躍期・変革期・成長期の熊取時代に分けて振り返り、第2部・未来編は各設置校の歴史と決意、次の100年に向けて提言をいただくために設置した浪商学園NEXT100構想有識者会議などを紹介。学科・コースの変遷や歴代役員、在籍者・卒業生数の推移などの資料も多数掲載した。

一方で柔らかい文章を心がけ、カラー写真を多数掲載してビジュアルな編集となったのも特徴。設立者の一人である野田三郎第2、4代理事長の生涯を振り返ったマンガも制作され、手に取って気軽に一読しやすい内容となっている。

歴史を振り返るにあたり、国立国会図書館、国立公文書館などで資料を精力的に収集し、設置認可に関する書類、決算書、校舎図など多数の貴重な資料をアーカイブとして保存した。

また、100周年プロジェクトとして、大阪青凌中学・高等学校の校舎が昨年4月、高槻市から島本町に移転され、大阪体育大学浪商中学・高校では3年前、100周年記念館が竣工した。

JR大阪駅のデジタルサイネージは3階南北連絡橋の改札内に設置された幅約4.5m、高さ約2.7mの大型サイズ。11月8日から1カ月間、「次の100年も、時代が求める教育を提供し続けます」と宣言し、大阪体育大学大学院・大阪体育大学など各設置校をキャンパスや校舎の画像とともに紹介した。



JR大阪駅のデジタルサイネージ

スポーツで人を育てる

創立以来の精神は不変



浪商学園理事長 野田 賢治

自分で考えて行動するためには、これまで学園が関わり続けたスポーツの果たす役割は極めて大きいと考えます。

浪商学園が関西初の体育大学を開学した理由、背景は。

学園は創立以来、野球を中心にスポーツに力を入れ、創立者の一人である野田三郎氏はスポーツを通じた青少年の育成を一貫して基本に置き、その延長線上に体育大学があったのだと思います。三郎氏がオリンピックの中澤米太郎岸和田市長と意気投合し、大島鎌吉先生（初代副学長、東京五輪選手強化対策本部長）、加藤橘夫先生（初代学部長、東京大学教授）につながり、開学に至りました。

創立100周年を迎え、次の100年に向けて学園が注力していくことは。

各設置校が学園のビジョンに基づいて、次代に向けた長期ビジョンの策定を進めています。12月末に最終決定する予定ですが、その基本は建学の精神「不断の努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する」であり、社会に貢献する人材を養成することです。新しい学習指導要領は冒頭で、予測不能な時代に未来に向けて自分で考え行動できる人を育てることを基本にしています。

本学には開学時から「スポーツを通して社会に貢献する」という一歩先に進んだ思想を感じます。

大島先生から「0歳から100歳までの健康をスポーツで支えるんだ」とよく聞かされました。「赤ん坊が、はうのも運動。杖をつけて歩くのもスポーツ。我々はそれを支えなければならぬ」と。開学当初からそんな発想がありました。幼児や児童、生徒、学生を対象にするのは「学校体育」で、教員を養成します。また、当時は経済成長の一方で労働者の健康管理が必要にな

り、大島先生は「生産体育」に力を入れた。経済が発展すると欧米並みにゆとりや余暇時間ができてレクリエーションが必要になり、「社会体育」につながります。大阪体育大学はこの「学校体育」「生産体育」「社会体育」の3本柱でスタートしましたが、先見性があったと同時に、今も変わらずに必要な普遍性を強く感じます。



大阪体育大学茨木キャンパス=1982年ごろ

大学の56年間の歴史や実績についてのどのような思いや感想を持たれますか。

コロナ禍の前は毎年、20以上の同窓会、支部会などで卒業生と話をしましたが、社会のいろいろな場面でリーダーシップを発揮している人が多い。大学では競技者ももちろん育てますが、多様な体育・スポーツに関する知識を習得して、いろいろな場面で指導的な立場を取れる人間が見事に育っていると感じます。卒業生を見るたびに大団円のバイタリティーはすごいと思います。

大学での教育が指導者養成につながっている点が一番大きな実績ではないでしょうか。また、卒業生は母校愛が強いですね。大学の規模が大きくなり、8割近い学生がクラブに加入していて、縦横でコンパクトにつながっていることも理由の一つだと思います。

少子化など大学経営を取り巻く環境は厳しさを増していますが、今後の課題は。

少子化による入学者の減少は私立学校にとって未曾有の危機です。現在、4割ほどの大学が定員割れしていると言われますが、さらに増えていくでしょう。変化を恐れず柔軟に対応する必要がありますが、その一方で社会に貢献する人材を育てるためにスポーツを通じて教育していくことは変わりません。私たちは世の中の役に立つ人材をひたすら育て続けるつもりです。時代が変わる中で柔軟に対応しながら、浪商学園を継続させていくことが社会に貢献することだと信じています。



大阪体育大学熊取キャンパス



楠本教授が日本代表監督就任

ハンドボール女子

大阪体育大学ハンドボール部女子監督の楠本繁生・体育学部教授がハンドボール女子日本代表（おりひめ JAPAN）監督に就任した。本学の現職の教職員が日本代表監督を務めるのは、全競技を通じて初めて。楠本監督は本学ハンドボール部女子監督と兼任し、11月の全日本学生選手権大会（インカレ）で8連覇を果たした後、日本代表合宿を経て、12月、第25回女子世界選手権大会（スペイン）に臨み、クロアチアを降すなど4勝2敗だった。



楠本繁生監督

楠本監督は大阪・北陽高校（現・関西大学北陽）でハンドボールを始め、大阪体育大学で選手として全日本学生選手権で優勝。1987年3月の卒業後、保健体育科教諭として京都府立洛北高校に赴任し、在任23年間に全国高校総体で4連覇を含む7回の優勝を達成した。2010年から大阪体育大学の教員となり、ハンドボール部女子の監督に就任。今年11月、全日本インカレで史上初の8連覇（中止の昨年をはさむ）を果たし、実業団も加わる日本選手権で昨年まで2年連続準優勝するなど卓越した実績が評価された。また、U-24日本代表監督を務め、2018年の第24回世界学生選手権（クロアチア）で女子学生日本代表を優勝に導いた。

日本ハンドボール協会は10月18日、就任記者会見をオンラインで開き、多数のメディアが参加。日本協会の湧永寛仁会長は「東京オリンピックは開催国枠で出場したが、パリ五輪はアジア予選または世界最終予選を自力で突破せねばならず、高校・大学で他には例を見ない強いチーム作りをされてきた楠本氏に代表監督に就任いただくことになった。協会として全面的にバックアップしていきたい」とあいさつで述べた。

また、11月4日、世界選手権に向けたメンバー20名が発表され、本学の卒業生は13名が選出された。東京オリンピックの代表メンバーは3名のみで大幅に若返りがはかられ、本学卒1年目の相澤菜月（北國銀行）、中山佳穂（同）らも選出。世界選手権では本学卒業生の活躍が目立った。



選手に指示を出す楠本監督=全日本インカレ



パリ目指し、結果にこだわる

2024年パリ五輪出場に向けて、「楠本JAPAN」が船出した。
就任直後、楠本監督に意気込みを聞いた。



——日本代表監督に決まったことへの率直な感想は。

今までは戦う舞台がおおむね国内だった。世界でどれだけ、これまでの自分の経験値が発揮できるのか試してみたい。代表は結果がすべてだ。大学では教育活動として、過程や試合の内容を重視したが、これからは勝つことがすべて。結果にこだわる戦いをしたい。

大学では、メンバー構成も1年1年変わったが、日本代表でもその時の旬の選手をどれだけうまく配置して、総合力として大きなベクトルにするかが重要。学年、年齢にこだわらず勢いのある選手をどんどん使い、代表の選手も固定ではないという風通しのいいチーム作りをしたい。

——東京五輪は開催国枠で45年、11大会ぶりに出場し、1勝しました。どう評価しますか。

結果から言えばヨーロッパ勢（モンテネグロ）から1勝したけれど予選リーグは1勝4敗で敗退し、ファンから見れば残念な結果だと思う。メンバーも一新して、過去の歴史や世界と日本の違いを十分に分析して、次に向けて準備していく。

——パリ五輪に向けてどう強化していきますか。

パリはアジアで1枠しかない。韓国は世界のトップにいたころよりもレベルは落ちているが、まだまだ日本より上。韓国以外にも中国の大きさとか、てこずる相手はほかにもあるので、どう選手が力を発揮できるのか、トレーニングしていくしかない。

——日本が世界で勝つために強化すべき部分は。

自分たちより大きい選手と戦わねばならず、普段とは違う当たりを受けてミスが誘発され、ミスで勝敗が決まる。ハンドは接触する競技なのでコンタクトの強さ、フィジカルを上げることが勝つための大きな要素だ。

——フィジカルは世界と大差がある？

世界のベスト8に入るチームと比べると、平均身長で10センチ以上違う。体重も相応に違う。おのずとハンドボールで一番必要なコンタクトが弱くなり、点数差に表れる。そこをどう限られた時間で立て直せるかが課題だ。

——楠本JAPANが目指すハンドボールとは。

すべての面においてのスピード。例えばコンタクトに行くスピード、戻るスピード、攻めるスピード、パスのスピード。今まで以上のことをしないと結果は出ない。ハンドボール日本女子の50年間の歴史で過去の監督さんはいろんな努力をしてきた。直接お会いして話を聞き、伝説のような百日合宿などの過酷な合宿をしても勝てなかった過去を聞いている。いろんな試行錯誤をしながら打ちのめされてきた。自分はやったことが結果に残る努力をしたい。

——大学での教え子が多数、日本代表選手に加わっているが、指導でのメリットは。

選手起用では、監督がその選手の人間性、性格をどれだけつかんでいるのかが大きなウエートを占める。大学で指導した選手の考え方や性格は理解しているつもりなので、それ以外の選手とコミュニケーションを取れる時間が多く作れるという意味でメリットがあると思う。

——洛北高校と本学でともに実績を残しましたが、高校と大学での指導の違いは。

高校は実質2年半しかなく、スタート時はハンドボールの経験者がほぼゼロで、生徒が入部の目的を「全国で勝ちたい」と言ってくれるのに長い時間がかかった。だから、高校では早く結果を出したいので、答えをすぐに教える指導をしていたと思う。しかし、大学では、選手自らに考えさせることを重視し、練習でも「質問形式」を多くしている。質問に対して、自ら言葉でそのプレーを選んだ理由を伝えることができないと、上達はしないと言っている。そのへんの答えは大学生の方が高校生よりも考えてやっているのがよく分かる。

代表チームでも、選手がどういう考えなのか知っておきたい。ぎりぎりの局面で「この選手はこういう考え方だから、入れ替えた方がいい」などの判断要素になる。代表合宿でも、選手がどんな考え、どんな意図でそのプレーをしたのか、突き詰めて聞いていきたい。

ハンドボール部女子史上初 インカレ8連覇

男子も準優勝

ハンドボールの高松宮記念杯男子第64回・女子第57回全日本学生選手権大会（インカレ）が11月6～10日、山梨県で開かれ、大阪体育大学は女子が



8連覇を果たし歓喜の涙を流す選手たち

8大会連続9回目の優勝を果たし、男女を通じて史上最長だった連覇の回数を更新した。男子も準優勝となった。

女子は決勝で、東京女子体育大学と対戦。前半は11-15と先行されたが、後半は尾辻素乃子（体育4年）らの速攻で3連続得点を挙げるなどして追い上げ、27-27で延長戦へ。延長後半、高木奈央（体育4年）の得点やGK山本春花（体育4年）の好セーブなどで相手を振り切り、32-30で、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い中止となった昨年をはさんで、男女を通じて史上最長となる8連覇を達成した。

楠本繁生監督は試合後、連覇にちなんで8回胴上げされた。

山本春花主将は試合後、「今春卒業した先輩は圧倒的に強く、絶対に優勝できたはずなのに、昨年は大会がなくなった。先輩の分も優勝することができ、素直にうれしい。また、今年の体大は弱いと周囲から見られていたが、周りの評価を見返すことができた」と語った。

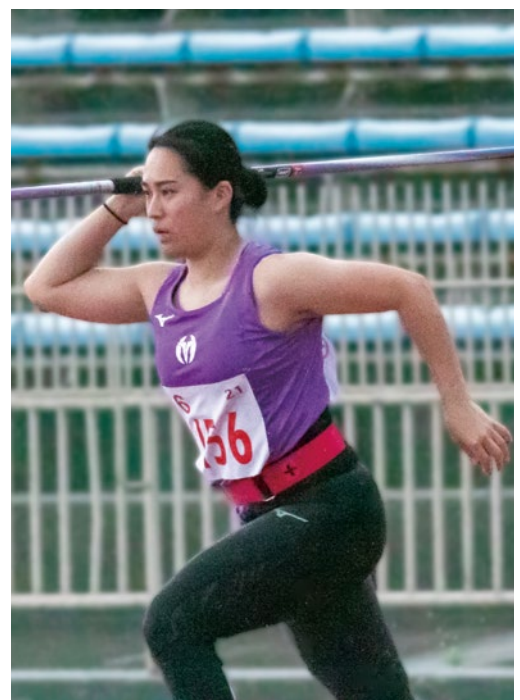
一方、男子は準々決勝で中京大学を残り1秒で30-29と逆転し、準決勝も延長の末、日本体育大学を38-37で降して決勝に進出。決勝では中央大学に28-32で敗れて2大会ぶり11回目の優勝を逃したが、前回（2年前）の8位から大きく順位を上げた。

藤田響主将は「大会前は状態は良くなかったが、勝ち上がるごとにチームが成長した。決勝は、後半くらいのパフォーマンスを前半に出せたら結果は違ったかもしれない」と振り返った。

武本がやり投げ初V

陸上インカレ

400M岩崎 本学初の表彰台



武本紗栄=5月の関西チャンピオンシップ

陸上競技の第90回日本学生対校選手権大会（インカレ）で本学勢の表彰台が相次いだ。

女子やり投げでは武本紗栄（体育4年）が59m90をマークし初優勝した。昨年は2位だったが、今年6月の日本学生陸上競技個人選手権大会で目標にしていた60mの大台を一気に超える62m39の自己新記録で初優勝するなど好調を維持し、学生チャンピオンの座に。武本は「日本インカレは自分の過程として勝たなければいけない大会として位置付けた。優勝できて素直にうれしい」と振り返る。

また、男子400mでは岩崎立来（体育3年）が46秒59をマークして2位に入った。インカレの男子400mでは本学勢が表彰台に立つのは初めて。400mは男女合わせての表彰台も43年ぶり、男子短距離全体でも表彰台は29年ぶりの快挙となったが、「優勝



岩崎立来=5月の関西学生チャンピオンシップ

を狙っていたので悔しさが残る」と振り返る。今季は5月の静岡国際5位、関西学生チャンピオンシップ優勝、6月の日本選手権7位と好調に見えるが、日本選手権直前に左足ハムストリングに違和感を覚え、以後はそれまで積極的に飛ばしていたレース前半を抑え気味に走ったという。来季はユニバーシアード、世界陸上の初出場を目指す。

公立学校教員採用試験

過去最多更新 63人現役合格 既卒者も例年別途100人以上

大阪体育大学の令和4年度(来春)採用の公立学校教員採用試験合格者(延べ)が、過去最多だった前年度をさらに8名上回る63名に達した(11月現在)。内訳は、教育学部が51名、体育学部が12名。

平成27(2015)年4月に開設された教育学部はこれまで1期生が44名、2期生が41名、3期生が42名現役合格し安定した成績を残してきたが、今回、4期生が初めて50名の大台を超えた。

校種別では、小学校38名、中学校13名、高校1名、いきいき1名、特別支援学校10名。自治体別では、大阪府12名、大阪市9名をはじめ、関西では滋賀県で4名、兵庫県で3名、京都府で3名が合格したほか、高知県で8名、愛媛県で6名、横浜市でも4名が合格している。

また、既卒者は令和3年度採用では高校などに110名以上が合格した。今回も前年並みの合格者数が見込まれている。

教壇を目指す学生を手厚くサポートし、合格に導くのが教職支援センターだ。今回、過去最多の合格者数を更新した背景などについて、清水俊彦センター長に聞いた。



清水俊彦教職支援センター長

——**現役合格者63名をどう評価するか。**
過去最多だった昨年に近い数字になることを願っていたので、8名プラスはとてうれしく思う。ただ、教育学部は過去最多の51名だったが、体育学部は12名でほぼ横ばい。そこを伸ばしたい。

——**今回、合格者が増えた理由は。**
教育学部の吉美(学)教授に聞いたが、今年度の4年生は入学時から意識が高く教員のアドバイスに従って教員採用試験の準備をしてきたといい、その熱意の結果だと思う。

——**教育学部生の合格者が多い背景は。**
各教員採用試験の合格率はおおよそ、小学校と特別支援学校が2〜5倍、中学は5〜15倍、高校は10〜30倍。教育学部は小学校(合格35名)、特別支援学校(同10名)を目指す学生が多いことも数字に反映されている。体育学部は高校の教員を目指す学生が多いが、高校は現役合格が難しく、講師を数年経験した後で合格する例が大半だ。既卒者は昨年、高校を中心に114名が

合格していて、今年も同じ程度の合格者が見込まれる。

——**教員採用試験に限らず、本学では在学中にグンと伸びて合格を手にする学生が多い印象がある。**
その通りで、要因としては1年次のキャリアガイダンス、2年次のグループ面談、3年次前期の全員の個人面談との面談は難しいと思うが、本学は学生の顔を覚えるくらいに一人一人と徹底して向き合い、それを機にモチベーションが上がリコツコツ勉強する学生が多い。面談では試験対策だけでなく一般的な悩みの相談もあり、カウンセリ

ング効果が利いていると思う。また、学部の先生方の指導とは別に、学習支援室がSPI対策を徹底し、各種支援講座、オンライン講座、教職支援センターの校長経験スタッフ3名による、時に厳しいほどの面接練習なども、合格に向けた武器になっている。

——**普段から学生と接していて感じることは。**
学生からは教職に対する熱い思いを感じる人が多い。大まかに2タイプに分かれ、中高校時代につまずいた自分を支えてくれた恩師のような存在を目指す学生と、自分がクラブなどで頑張った成果を出した経験から、生徒たち「頑張ることの大切さを伝えたい」と考える学生だ。熱い思いを持っている学生はモチベーションが高く、現役で合格するケースが多い。

藪田がBMX・W杯初V 増田はジャパンカップV



©日本自転車競技連盟

国際自転車競技連合(UCI)BMXスーパークロスワールドカップ(W杯)の第7、8戦が10月30〜31日にトルコであり、第7戦の23歳以下で藪田寿衣(体育2年)が初優勝した。

藪田は大阪体育大学DASHアスリート。第8戦では4位だった。第5戦も2位で、W杯全8戦のシリーズ総合成績でも日本選手最高の3位になり、表彰台に立った。藪田は「スタートからトップを走ることができ、さらに優勝という結果を残せてとてもうれしい」と語った。

また、同じくDASHアスリートの増田優一(体育2年)は、11月28日に初開催された国内トップ選手を集めたジャパンカップで優勝。「初代王者になってすごくうれしい」と語った。

ハイパフォーマンススポーツセンター

連携機関に本学を指定

スポーツ医・科学研究やサポートを含めた日本の国際競技力の向上の中核拠点である「ハイパフォーマンススポーツセンター」(HPSC・東京都)の全国9か所の連携機関(体力測定)の一つとして大阪体育大学が選ばれた。同センターを運営する独立行政法人日本スポーツ振興センターから、10月25日付で指定された。

HPSCは、国立スポーツ科学センター(JISS)、味の素ナショナルトレーニングセンター(NTC)の機能を一体的に捉えた、日本の国際競技力向上の中核拠点。アスリートが、HPSCがある東京以外でも高度な医・科学支援を受けられるように、初めて地域の大学や医・科学センターなどと連携することになり、体力測定分野で公募を経て9施設が指定された。

本学は、附属施設のスポーツ科学センターが筋力、有酸素性能力の2項目の測定を実施する。

スポーツ科学センターはアスレティックトレーニング(AT)、ストレングス&コンディショニング(S&C)、心理、栄養、測定評価の5部門が連携しながら学生アスリートを科学的にサポートしている。今後の具体的な測定計画などは未定だが、指定により関西などを拠点にした強化指定選手が地元で医・科学サポートを受けやすくなる

ことが期待される。

スポーツ科学センター長の三島隆章体育学部教授(スポーツ生理学)は「これまで東京でしかできなかった体力測定を地方でも同じ手順で実施してデータも相互に比較できるようになり、地方の選手にとつてのメリットは大きい。本学にとつても、学生がトップアスリートの測定を直接目にする事ができるようになることで、競技力の向上やスポーツ科学の学びにつながる事が期待されます」と話している。



スポーツ科学センターに設置された測定機器

日本水泳・水中運動学会を開催

パラリンピアン宇津木が講演

＜クラスの分け方＞		
短距離がい	中距離がい	長距離がい
1-10	11-13	14
S-自由形、背泳ぎ、バタフライ SB-平泳ぎ(SB10はなし) SM-個人メドレー		

オンラインで講演をする宇津木選手

日本水泳・水中運動学会の年次大会が10月23、24日、大阪体育大学を会場にオンラインで開催された。本学が主管大学を務め、浪商学園創立100周年記念事業として、一般講演会「東京オリンピック・パラリンピック競技大会報告」も実施された。

講演したのは、本学教育学部1年で

パラリンピック女子100メートル平泳ぎ(SB8)で6位入賞した宇津木美都選手のほか、下山好充競泳コーチ(新潟医療福祉大学)▽貴田裕美選手▽女子マラソンスイミング13位▽榎本遼香選手(栃木県スポーツ協会)▽女子シンクロ板飛び込み5位▽南隆尚・水球広報・主務(鳴門教育大学)▽本間三和子・日本水泳連盟アーティスティックスイミング委員長(筑波大学)。本学の川島康弘准教授らが司会を務めた。

それぞれが自身の経験を基に東京大会までの取り組みや大会本番での結果、様子などを報告したが、特に多かったのは新型コロナウイルスの感染拡大の影響。活動の休止や制限でトレーニングがままならず数年がかりで取り組んできたチーム作りが無駄になったり、開催が不透明なままモチベーションを維持することに苦労したという。

宇津木選手は講演で、競泳を始めた経緯、アジア新記録を樹立するなど好調だった中学時代、スランプに陥り記録が伸び悩んだ高校時代、そして現在の大学での指導者陣との出会いを経て東京パラリンピック出場を決めるまでの苦労や、肌で感じたパラリンピックの感想を報告。「最初は会場の大きさと雰囲気を取らされたけれど、スタート前には冷静に集中できた。1日に2回のレースを泳ぐ国際大会ならではの経験も積むことができた。パリ五輪でメダルを狙っているので良いトレーニングを継続したい」と話した。

このほか、多彩な発表や演題などが実施された。

わくわくアダプテッド・スポーツクラブ 文部科学大臣表彰



表彰式に参加した皆さん

特別支援学校の生徒・卒業生と本学の学生が一緒に活動し、スポーツの楽しさを伝える「大阪体育大学わくわくアダプテッド・スポーツクラブ」が、「令和3年度『障害者の生涯学習支援活動』に係る文部科学大臣表彰」を受けた。

わくわくアダプテッド・スポーツクラブは、本学の2016～2020年度特色あるプロジェクト計画の研究事業「特別支援学校生徒のアダプテッド・スポーツ実践の場の提供とその効果」の一環として創設されたスポーツクラブ。第6体育館多目的アリーナで月に2回程度実施している。活動は学生が主体となって企画・実践し、植木章三教育学部長が代表を務め、教育学部の曾根裕二准教

授（アダプテッド・スポーツ）が指導にあたっている。

表彰式は12月7日、全国の受賞団体・個人計58か所と東京の会場をオンラインで結んで実施され、本学では植木学部長、曾根准教授らのほか、同クラブに参加している学生のうち13名が教室で参加した。各受賞者の紹介や代表者への表彰状の授与、池田佳隆文部科学副大臣の祝辞などがあった。

表彰式の後、植木学部長は参加した学生に「受賞を励みにこれからも活動を継続できるよう大学を挙げて一丸となって活動していきたい」と活動のさらなる発展を誓った。

名誉教授称号授与式を実施 岩上前学長、栗山元教授招く

指導した。

式には元副学長の福田芳則名誉教授や教職員が参加。2人は原田宗彦学長から名誉教授称号証書を受け取った。

令和3年度の大阪体育大学名誉教授称号授与式が11月18日に行われ、今年3月末で退職した岩上安孝前学長、栗山佳也元教授に証書が授与された。

岩上前学長は文部省（現文部科学省）体育局長兼スポーツ課長、国立スポーツ科学センター（JISS）長などを経て2014年2月に本学副学長、4月から第8代学長を務めた。栗山元教授は筑波大学を卒業後、公立高校の教諭を経て1982年、本学に着任。やり投げ選手として1981年アジア選手権で2位、1982年日本選手権で優勝し、39年間、陸上競技部や学生を

岩上前学長は「ハンドボールのインカレで女子が8連覇、男子も準優勝と活躍し、私もとてもうれしかった。私がかつて大切にしている山本五十六（連合艦隊司令長官）の言葉で「ほめ、任せ、信頼する」ことの大切さが述べられている。人を育てる大学としてそのことを根底に置いて進んでほしい」とあいさつした。栗山元教授は「私は茨木で6年、熊取で33年、ただただクラブの強化を一番の目標に置いて、とにかく学生の競技力を上げることに費やした」と本学での39年間を振り返った。



名誉教授称号授与式に参加した皆さん

福島復興「サンライズキャンプ」学生が支援活動を報告

今年3月22～25日に実施された福島復興支援「第14回サンライズキャンプ」の活動報告会が11月15日行われ、参加学生のうち約10名が活動内容を報告した。

「サンライズキャンプ」は東日本大震災が起きた2011年の10月、福島県から大阪に避難した子どもたちと大学構内で1泊のキャンプをしたことがきっかけで始まり、学生が「日はまた昇る」として名付けた。12年はがれきや土砂の撤去が主だったが、13年からは地域のNPO法人と連携し、高齢者への体力測定や仮設住宅でのサロン活動など、その時のニーズに合わせて内容を少しずつ変えながら支援活動を継続している。今年にはコロナ禍の中感染対策に配慮しながら、応募があった16名の学生と5名の教職員で実施した。

報告会では「環境整備活動」「高齢者体力測定・運動指導」「原子力災害伝承館見学」などそれぞれの活動ごとに報告。学生は「環境整備活動で十数人がかりでも1本の道をきれいにすることができなかつたり、被災者を励ますつもりが逆に元気をもらったりと、とても多くのことを学び、自分が変わるきっかけになった」「被災地の方から『今年も来てくれた』と喜ばれ、来年以降もこの関係を崩してはいけないと思つた」などとキャンプで得た学びなどについて、会場の学生ら約70人に語りかけた。



サンライズキャンプ活動報告会

タイミング良く具体的に子どもをほめる指導者に



田中章博（たなか・あきひろ）
1951年9月18日生まれ、70歳。大阪体育大学体育学部卒、6期。大阪府摂津市立第一中学校（一中）に保健体育科教諭として赴任。その後、三中、二中などでサッカー部を指導し、近畿大会で3回優勝。中学で本田圭佑選手（元日本代表）、森下仁志選手（現ガンバ大阪ユース監督）らを育てた。現在は本田選手がプロデュースするソルティエロ大阪FC代表。

サッカー「ソルティエロ大阪FC」代表

田中章博さん

大学卒業後、中学で長年、サッカー部の監督を務め、摂津市立第二中学、第三中学を強豪チームに育て上げた。一方で「日本サッカーの父」と呼ばれたデットマール・クラマー氏と出会い、「子どもに教え込むのではなく、子どもから可能性を引き出す指導」に転換。現在は本田圭佑選手（元日本代表）がプロデュースするソルティエロ大阪FC代表として15歳以下を教えるほか、本学でも講師を務める。本田選手ら多数のJリーグ選手を育てた経験から「指導では、子どもをほめることが大切」と話す。

大阪体育大学に入学した理由は。

小学校からサッカーを続け、「大学卒業後もサッカーをするのなら、選手よりも先生の方が可能性があるなあ」と自然に考えて、指導者の道を選びました。実家の京都・西京極から近い、茨木市（当時）の大体大に進みました。

大学の4年間は。

サッカー部は1年の時に4部リーグ。2年で3部、3年で2部に昇格し、主将だった4年で2部優勝。入替戦でも勝ち、1部に昇格しました。40年以上大体大の監督を務めた坂本康博さんは1年先輩。高校時代に専門的な指導は受けておらず、大学1〜2年の時に「ああ、サッカーはこう攻撃し、こう守るんだ」と理論と経験を結びつけた指導

に驚きました。指導に飢えていたのだと思います。3〜4年では勝負の厳しさを学びました。

中学での指導は。

中学で生徒が過ごすのはクラスとクラブ。クラスは学級の40人ぐらいとしか接しませんが、クラブは3学年の部員のことが見えます。試合に行けば他校の生徒も見えます。「クラブにはすごい教育的効果がある」と信じた。赴任2年後に移った摂津三中では、校内暴力など荒れている時代に「クラブで学校を変えよう」という雰囲気校内にありました。

新任5年目でサッカー部は大阪府大会、近畿大会で優勝し、全国ベスト8。指導約10年間に近畿大会で3回優勝し、全国大会に3回出場しました。やっぱり勝ちたかったし、勝てば子どもは伸びると信じていました。

しかし、三中ではその間に不登校の数が増えていました。「勉強はここまで頑張れ、クラブもここまで頑張れ」と子どもを追い込んだのだと思います。

指導の転機は。

サッカー日本代表の礎を築いたクラマー氏との出会いです。A級コーチジュネラルライセンスを取得していたこともあって三十代半ばのころ、クラマー氏を招いたユースアカデミー合宿に2週間近く参加しました。個人面談でクラマー氏に「日本一になりたい」と話したら、「あなたは教師だろう。勝つこ

とよりも育てることが大切。なぜ教師が勝ちたいと言うのか」と叱られました。「あなたの勲章は何人の子どもを育てたか、だ。トップ選手と、生涯かけてサッカーを長く愛する選手。どちらの選手の育成にも同じ価値がある」と。クラマー氏との出会いがなければ、自分はずっと突っ走っていたと思います。

W それまでは、自分から選手にプレーを教え込んでいました。でも、選手がクリエイティブにプレーするためには自ら判断し決断する場を練習でたくさん作る必要があります。「教え込む」から「引き出す」に指導を変えました。

すぐに結果は出ません。でも自分が若いころ「こうしろ、ああしろ」と教え込んだ選手は高校ではあまり伸びませんでした。サッカーには正解がいくつもあります。コーチは一つの正解を押し付けがちですが、それ以外の正解を見出す選手は多い。そんな選手は高校でも伸びています。

—— 本田選手との出会いは。

二中にいた時、本田君の兄が入学しました。本田君は小学4年でしたが、3年間、ずっと兄とサッカー部に来了。正式な部員ではない気安さもあり、いいところを認めてどんどんほめました。本田君は無心にボールを追い、とてもポジティブ。勝敗すらどうでもよくて、自分のプレーがどうだったかを常に聞いてきます。自分自身を客観的に見つめ、

観察の矢印を自分自身に向ける子で、学ぶ力がすごいと思いました。

—— 他にも数多くのプロ選手を育てられました。

現ガンバ大阪ユース監督の森下仁志選手、関西協会の関西トレセンで教えた宮本恒靖選手（ガンバ大阪元監督）、稲本潤一選手（元日本代表）ら。指導者になった選手が数多くいます。今は、指導をしてほしいと思っています。サッカーをしてほしいと思っています。自分自身、大学の4年間で大きく成長しました。まず大学でプレーし、そこからチャンスがあればプロを狙ってほしい。

—— 現在は本田選手がプロデュースするソルティエロ大阪FC代表として15歳以下を指導されています。

摂津二中の校長時代に摂津二、四、五中合同の町クラブ「摂津パルティエダ」を作ったのがきっかけです。少子化でサッカー部員が減り満足に部活動ができない生徒のため、週1、2回ナイター練習をしていました。5年ほど経った後、本田君から「中学で部がなくなったり部活でうまくいかない子どものためにサッカーチームを作りたい。先生のパルティエダといっしょにできないか」と連絡がありました。そのころ摂津四中のサッカー部が廃部になったこともあり、「それなら」とソルティエロ（当時はSTFC・パルティエダ）を結成しました。今、15歳以下を指導して

いて思うのですが、選手はいい感性を持っていて自分の思いを伝えるのが苦手。たくさん話せるリーダーがいるチームは強くなります。

—— 将来、学校やチームで子どもや選手に勉強、スポーツを教える体大生は数多くいます。彼ら彼女らにメッセージを。

どうぞ、子どもをほめてください。私は学校で掃除の時間にふざけている

子どもを叱っていましたが、ある日、地域の方から「そんな場でもきちんと掃除している子もいるでしょ」と。それから、ちゃんと掃除している子には「掃除してくれてありがとう」とほめるようにしました。ほめる時はタイミングと具体性が大事です。単にありがとうではなく、「こんな騒がしい時に」と付け足すなど。ほめる指導者になってください。



モニター体験会「なりきり剣士体験」

「武道ツーリズム」を実施

大阪体育大学は11月27日、スポーツ庁委託事業「武道ツーリズム」のモニター体験会を本学の武道場（第1体育館）などで実施した。「なりきり剣士体験・SAMURAI EXPERIENCE」と題し、関西在住の外国籍の方8名が剣道、なぎなたを体験した。

スポーツ庁はポストコロナに向けて、スポーツを通じて国内旅行の需要を高め将来的なインバウンドの地方への誘客を目指す「スポーツによるグローバルコンテンツ創出事業」を進めている。そのひとつである「武道ツーリズム」は、日本発祥の武道と歴史・文化を組み合わせ、日本でしか体験できないツーリズムコンテンツを創出し、国内外の旅行者の更なる地方誘客を図る取り組みだ。

令和3年度スポーツ庁委託事業として本学の「大学×競技団体×自治体」で目指す地域文化・観光資源を活かした体験学習型グローバルコンテンツ創出事業」が採択された。

モニターは米国、英国など外国籍の方8名で、ツーリズムではまず、プロジェクトリーダーの藤本淳也教授が歓迎の挨拶。参加者は武道場に移り、剣道部やなぎなた部の学生の手を借りて袴姿に着替えた後、剣道部の村上雷多監督から礼節を重んじる日本武道の精神や正しい正座、礼の作法などの説明を受けた。

続いて、「剣道」と「なぎなた」の2班に分かれ、剣道は村上監督、なぎなたは天川彰子監督が指導し、両部の学生が補助を務めた。監督からの全体への説明は通訳を介して伝えられたが、細部の実技指導は学生部員が懸命に英語で伝えて、参加者は次第に竹刀やなぎなたを振れるよう

に。体験の終盤、参加者が部員に挑戦するプログラムは大きな盛り上がりを見せた。

来年1月には、観光や宿泊も組み込んだ1泊2日でのモニター体験が行われる予定。



▲なぎなた部員から構えなどを学ぶ参加者



◀礼を学ぶ参加者



徳田真彦講師からストレッチングの指導を受ける参加者

「本学×ロート製薬×泉佐野市地域法人」コラボ健康増進ツアーを実施

運動、レクリエーション、栄養などを担当した。

参加者は27日朝、南海電鉄なんば駅から特急ラピートに乗車。車内では富山ゼミの学生らが泉佐野市にちなんだ三択クイズを実施。

「市の公式キャラクターのイヌナギンは、どれ」「関西国際空港の英字3文字の空港コードは」などの問題をボードで元気よく出して、大いに盛り上がった。

一行はロート製薬が運営するメディカルりんくうポートの「りんくうウェルビナステーション」内での健康チェック、いずみさの関空マリナーでのクルージングなどの後、本学卒業生でヨガインストラクターの池田有美さんとともにヨガを体験。富山研究室の助手の小田美幸さんが友金明香・体育学部准教授（体力学）監修のウォーキングを指導。宿泊先のホテルでは、岡村浩嗣・体育学部教授（スポーツ栄養学）研究室の北口瑞生さんが岡村教授監修

の「食事と運動」について話した。

2日目は地元の泉州野菜の収穫作業などのほか、犬鳴山七宝龍寺へのトレッキングなどを実施。参加者は徳田真彦・体育学部講師（野外教育）の指導を受けた。

大阪体育大学、ロート製薬、泉佐野市の地域DMO「泉佐野シティプロモーション推進協議会」がコラボした「健康増進モニターツアー」が11月27～28日の1泊2日、泉佐野市内で行われ、モニターツアー客15人が市内の各所を巡った。



本学のスタッフからウォーキングのポイントについて説明を受ける参加者

このツアーは3者で共同企画され、9月、観光庁から「地域の観光資源の磨き上げを通じた域内連携促進に向けた実証事業」に採択された。本学は富山浩三・体育学部教授（スポーツマネジメント）が中心になり、

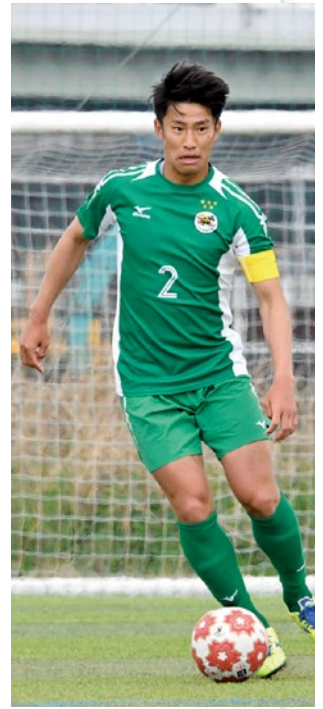


泉森涼太

サッカー部の小川、泉森が Jリーグへ

愛媛FC、鹿児島ユナイテッドFC

サッカー部男子2選手のJリーグ入団が決まった。
主将の小川大空選手はJ2の愛媛FCに入団。小川選手は、主将を務め200名を超える部員をまとめる存在。「まずは、大阪体育大学で磨いた人間性をピッチの内外で発揮し、試合に絡むことはもちろん、自分の特徴であるキャプテンシーと攻撃的なプレースタイルで、チームの中心選手となれるよう頑張ります」とコメントした。
GKの泉森涼太選手はJ3の鹿児島ユナイテッドFCの加入が決まった。泉森は鹿児島城西高校の出身。「幼い頃からの目標であったプロサッカー選手のキャリアを、高校でお世話になった鹿児島の地でスタートできることを嬉しく思います。1日でも早くピッチに立ち鹿兒島のJ3優勝、J2昇格に貢献します」と誓った。



小川大空

キャンプ 実習



テントやタープを張って設営技術を学ぶ



かまどにたきぎをくべ火をおこす

キャンプ実習が熊取町の野外活動ふれあい広場とその周辺で実施され、2年生を中心に約340人が参加した。8月に始まり、新型コロナウイルス感染症の影響でいったん途中で打ち切りとなったが、感染対策を徹底して残りの日程を10月に実施した。キャンプ実習は兵庫県香美町の美方高原で4泊5日の日程で実施される予定だったが、感染症対策として8月下旬、熊取町で3日間の日帰りで3クールに分けて開催されることに。しかし、参加者の中に自宅待機者などが出た影響で第2クールでいったん打ち切り。残る第3クールは、感染者が減少した10月23、24日、感染対策を徹底して2日間の日帰り日程とし、約100人が参加した。

キャンプ実習は、ディレクターやスタッフの下で教育的な目的のために実施される組織キャンプの理論や技術、教育的価値や生涯スポーツとしての価値を理解する。クラブの専門種目を離れて日ごろ行っていない活動をゼロから始め、新たなグループの中で人間関係がどう形成されていくか非日常空間で体験してもらうことも実習の目的だ。担当の富山浩三教授は「本学の学生はクラブ活動などを通じて高いコミュニケーション能力を備えていることが多く、実習を通じて深い人間関係を築いている」と話す。

10月の第3クールでは、開校式で学旗の掲揚や学歌の演奏などの後、2組に分かれて2日間、野外生活技術とハイキングに取り組んだ。野外生活技術では、キャンプ場でテントやタープを実際に張って設営技術を学び、かまどでたきぎをくべ、火をおこした。また、ハイキングでは雨山までの往復2時間を歩いた。本学では、体育学部はキャンプをはじめ臨海、海洋スポーツキャンプ、ゴルフ、スキーの5つ、教育学部は冬季と夏季の野外活動実習があり、リーダーシップや人間力などを養う場として重視している。

今年は海洋スポーツキャンプ、臨海実習は実施できたが、スキー実習の中止がすでに決まるなど昨年に続きコロナ禍の影響を受けている。

富山教授は「スポーツに取り組む学生にとって、専門種目とは違う野外の場で人間関係作りをすることは、スポーツの幅を広げるために絶対重要。縮小にはなったが、学生がキャンプを通じてその一端に触れたことは良かった」と話している。



雨山までハイキング

学園祭「雨山祭」をリアルと一部オンラインで開催

テーマは「Re Start」

リスタート



学園祭「第54回雨山祭」が10月31日、様々な新型コロナウイルス感染症対策を取り、熊取キャンパスで開催された。コロナ禍2年目となる雨山祭は、参加者を学生・教職員に限り、期間を昨年と同様に2日から1日に短縮。検温、消毒、ソーシャルディスタンスの確保のほか、のど自慢大会でマイクを1人1本用意するなどの対策を取ったうえで、昨年より内容を拡大し午前10時〜午後6時のスケジュールで熊取キャンパスを会場に実施した。一部の模様はオンラインで紹介した。

テーマは「Re Start」(リスタート)。「コロナ禍で学生生活が大きな影



ダブルダッチ部のパフォーマンス

祭実行委員長の田澤良多さん(体育学部2年)は、「緊急事態宣言が出て、途中まで開催できないと思っていただけに本当にうれしい。伝統ある行事を後輩へ引き継ぐことができてよかった」と話していた。

響を受けている中で、「再びスタートしよう」という強い思いを込めた。午前中は、第4体育館で「ポッチャ」と「ゴールボール」が行われ、事前に参加申込みをしていた学生がゲームを体験し、それぞれの競技の魅力を感じた。ポッチャは、日本代表強化選手の内田峻介さん(教育学部1年)と東京パラリンピックで日本代表コーチを務めた曾根裕二准教授がデモンストレーションを行い、投げる時のポイントなどを説明した。また、特別企画として「東京オリ・パラ関係者インタビュー」があり、内田峻介さんがポッチャの魅力や、パラリンピック開会式で聖火の最終点火者を務めた際に感じたこと、今後の目標などについて実行委員からの質問に答えた。

午後は、屋外のステージで、「のど自慢大会」「仮装コンテスト」「ビンゴ大会」や、ダブルダッチ部によるパフォーマンスが披露され、大いに盛り上がった。

終了後、雨山



内田峻介さんと曾根裕二准教授によるデモンストレーション



ポッチャに挑戦する学生

断水中の和歌山北高校にミネラルウォーターを寄贈

和歌山市で水道用の橋が崩落し市北部の約6万戸で断水が続いている中、大阪体育大学が10月8日、断水のため休校している和歌山北高校に、ミネラルウォーター約1400本を届けた。

和歌山北高校は普通科とスポーツ健康科学科を備えた県立高校で、北校舎(和歌山市市小路)と西校舎(和歌山市西庄)に計1179名の生徒が在籍している。断水後は休校してオンラインのみの授業が続いていた。

同校は本学から40キロ弱と近く、卒業生4名が現在本学で学び、本学の卒業生3名が保健体育科教諭として勤務するなど縁が深いこともあり、水を届けることに。本学の職員が2台の車で、在庫があった本学オリジナル・ミネラルウォーター500mlの24本入りケース59箱を同校西校舎に届けた。

同校の西上嘉人副校長や本学OBの教員ら約10人が車からケースを運び出し、同校の卒業生で体育学部3年の望月愛加さんも作業に加わった。

西上副校長は「大変助かります。学校を再開する月曜に生徒に1本ずつ配ります」と話していた。



母と父の物語



コラム **ボーシヤ**

名誉教授 和田隆夫

ぼくたちは親を「親」としかみない。「親」の部分以外に関心はない。そのことは家制度の家族でも核家族でも変わりはない。それでこそ家庭の平穏は保たれる、と思っていた。しかし誰にも人生の物語はあるのだ。

朝から迷惑な番組がある。NHKの連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」である。三代にわたる女性の物語だが、泣かされるシーンが多すぎる。初代ヒロインの安子を演じる上白石萌音の好演だけではなく、脚本（藤本有紀）がいい。

ぼくには、安子の人生と母の人生が重なる。

ドラマの舞台は岡山。安子は大正14年に和菓子屋の娘として生まれる。家族に囲まれ幸せな少女時代を過ごす。やがて偶然に出会った青年と恋に落ちる。その後、紆余曲折はあるものの、学徒動員で出征する前にあわただしく結婚し、娘を産む。しかし夫は戦死する。

母は、大阪、堀江の仕出屋の娘だった。大正10年に生まれ、二人の姉と妹がいて、なかいとさんとしてのんびり育った。当時の写真を見ると、女学校時代の「おつきさま」というあだ名に似つかわしくない、どちらかといえば柴咲コウに似た顔立ちの、眼に気の強さが強くあらわれている、やんちゃな娘に見える。昭和18年2月、21歳の時に結婚した。夫は旧制中学校を卒業したあと、家業である大阪南地の老舗割烹料理店を継ぐべく修行中だった。12月に男の子を生むが、ドラマとは違い生まれてすぐに亡くなる。翌年2月に夫は召集され、同年7月に日本海で戦死した。

昭和25年に母は父と再婚する。父は初婚だった。二人の死から再婚までの間に書かれた母のメモが残っている。ドラマの安子には子どもがいるが、母は最愛の二人を失っている。書きなぐった文章には希望はまったくない。絶望と死への示唆のみが書き連ねられている。このメモから再婚するまでの心の軌跡はまったくわからない。父はどれだけ努力したのだろうか。母はどのように生きていたのだろうか。このあたりがドラマを見ていて涙する所以である。

母の再婚は、ぼくと妹にはながく秘密だった。ぼくは当然のように初婚だと思っていた。このことを突然知ることになる。

父が亡くなって数年たった頃である。ぼくはささいなことで夫婦喧嘩をした。妻は家を飛び出した。初めてのことである。2、3時間たって母から電話があった。妻は、自分の実家に帰らず、母を頼ったのである。説教を覚悟して実家に行くと、母は神妙にすわる二人を前にして、自分の最初の結婚の話をした。ぼくたちの夫婦喧嘩にはまったく触れず、仲裁する様子もなかった。母が話しおわると、ぼくたちは、抗することができない、すべての人生をのみ込む圧倒的な暴力、戦争のなかを生きてきた人間のすごみにつつまれていた。

（兄がいたのか）

妹にさっそく連絡すると、知っていると言われた。結婚前になにかいいものはないかと母の筆筒を物色すると、筆筒の引き出しの底に戦死した夫の最期の手紙と葉書、戦死公報をまとめてつづんだ、ふくさがあった。最期の手紙に同封されていた小さな桜貝もあったようだ。妹は文面のみを書き写したが、母に訊ねることはしなかった。手紙のことは母が自分から話すのを待とうということになった。しかし母は一切語らなかった。ただしある

とき九段会館で知人と会うことを話すと、靖国神社に前夫のお参りをしてほしいと頼まれた。

母の死後筆筒の中にふくさはなかった。

大学生の頃、友人と話をしている、「和田は長男らしくない」「どんなどころが」「長男にしては無責任だ」

ぼくは気色ばんで「無責任だと」「いや、悪い意味ではなく、自分らしい、身軽な生き方だということだ」「たしかに長男という枠はぼくにはない」と思っていた。

そういえば、両親から「長男だから…」といわれたことはない。少し不思議に思っていた。家風がリベラルなのだと思っていたが、兄の存在を知って、いろいろなことが氷解する思いだった。

母からみてぼくはどこまでも次男なのだ。父は、母のそんな秘した気持ちを大切に考え、ぼくに長男というレッテルを貼らなかつた。

しかし父と母がそうであっても、それは二人だけのことだった。親族はぼくを本家の跡取りとして別格扱いにする。父は長男で、兄弟姉妹は8人いる。正月には祖父母宅に40人近い親族が集まる。そのおりおせちとともに茶碗蒸しが振る舞われる。おせちと違い茶碗蒸しは当日調理される。祖母や叔母たちは忙しくしていた。そんな状況でもぼくの茶碗蒸しだけ特製で、好物のゆり根が大量に入れられていた。あるときこの一人がそのことに不満を言うと、祖母は「あととりだから」と言う。

こうしたことは親族が集まればいつものことで、そうした中で成長していった。長男を意識させない両親と本家の跡取りを意識させる親族のギャップは大きかった。この混乱はぼくの内部で熟成され、律儀だけ自由な性格として固定していった。

ぼくを長男とみれば兄の誕生を認めないことになる。母にとりぼくは次男でないといけな。その反面、ぼくを長男とみられない苦しみがあつたはずである

父は、「ぼくは次男」という母の隠された気持ちを抱きしめたまま、「長男」という言葉をぼくに使わず黙って死んでいった。

ぼくの精神的な混乱は、「母の兄への愛」と「父の母への愛」から生まれた愛に満ちた不幸だった。

戦争は人を殺し、生き残った者の人生を殺す。その悲劇の時代に二人の男が生涯にわたり母を愛した。三人の人生は、当時の日本人にとりめずらしいものではないだろう。

母と父の物語は、三人の若者が終戦の前後10年の間に交錯し、兄とぼくと妹が生まれる物語だった。

この物語は母の死で終わった。

母の最期の入院の2ヶ月前に教授に昇任した。教授の名刺を最初に母に渡した。母はうれしそうな顔をしていた。死後病室の片付けをしていると、母の眼鏡ケースの中にぼくの名刺が入っていた。誰に見せるわけでもなく、眼鏡を使うたびに名刺を見てくれたことを知った。今も大阪体育大学に感謝している。



窓

◆浪商学園が創立100周年を迎えました。記念誌委員会のメンバーとして改めて学園史を調べましたが、創立直後からスポーツとともにある学校だったことを強く感じます。特に、大学の初代副学長で東京五輪選手強化対策本部長を務めた大島謙吉氏が野田賢治理事長らに話した「0歳から100歳までの健康をスポーツで支える」には、深く考えさせられました。

◆大島氏は五輪三段跳びのメダリストで新聞社の運動部記者として活躍しました。私も同じ編集局の中ではどうしても「政治や経済が紙面の中心でスポーツや文化はその次」という感覚が生まれがちです。しかし、大島氏は「スポーツこそがより良い社会を作り、世界を平和にするための最適の手段であり、だからこそ尊い」という意識を強烈に持っていました。

◆そんな考えの元で生まれた大阪体育大学は現在、さらなる進化を目指し大きな改革を進めています。スポーツの可能性を信じる理念は不変です。L号館前のロータリー脇には、大島氏から贈られた月桂樹と碑があります。本学の新たな挑戦を、大島氏がそこから見守ってくれているのではないかと感じています。【大坪康巳】



極める力。

人を学び、育て、支える。

大阪体育大学

【大学院】

- スポーツ科学研究科
博士（前期・後期）課程

【体育学部】

- スポーツ教育学科
- 健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】

- 教育学科

大学事務局

庶務部、教学部、入試部、広報室
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設等

図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター
国際交流センター、学習支援室

<https://www.ouhs.jp/>

OUHSジャーナル 2021年（令和3年）12月21日（火）

発行所：大阪体育大学 広報室 発行責任者 大坪康巳 協力：教育後援会・学友会

大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1 電話（072）453-7021 FAX（072）453-8818